翔

はばたけ

発行者
秋田県横手市根岸町２-14
秋田県立横手城南高等学校
図書委員会

印刷　㈱アイ・クリエイト

芸術に縁（ゆかり）ある学校

校長　佐藤孝子

今年度、本校は秋田県図書館活性化モデル校に指定され、それに伴って、学校司書さんも配置されました。おかげで、図書委員とともに環境整備なども活発化され、館内の柱時計も動き出して日々美しいメロディを響かせています。今回はこの場をお借りして、美しい本校校歌について紹介します。

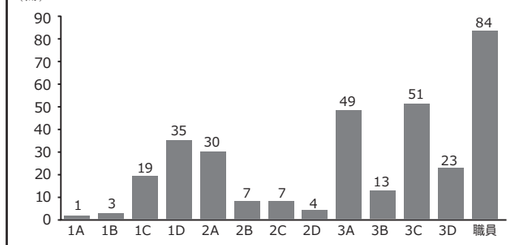
歌詞は幸田露伴氏作、本名成行（しげゆき）。一八六七年江戸（東京）に生まれ、長じて電信技師として北海道に赴任して官職につくも、文学を志して棄職しました。その後『風流仏』で評価され、『五重塔』『運命』などの文語体作品で文壇での地位を確立し、尾崎紅葉とともに「紅露時代」と呼ばれる時代を築きます。大正十一年頃、第三代校長沼田平治先生の依頼で、本校校歌の歌詞を作ることになりました。幸田氏本人は横手にいらしたことはないそうですので、おそらく沼田校長先生がいろいろお伝えした上で作詞したのではないかと思われます。当時、幸田露伴氏と沼田校長先生がやりとりした直筆の手紙が本校には残っています。

一方、作曲した小松耕輔氏は明治十七年、秋田県由利本荘市出身（旧東由利町）。東京音楽学校（現在の東京芸術大学）を首席で卒業後、学習院大学に講師、教授として長く勤務。大学卒業時には国内初となるオペラ「羽衣」を創作し、その後も多くの作品を作りながら、昭和二十二年、全日本合唱連盟を結成し、第二回全日本合唱コンクールを開催しました。（このコンクールは現在まで続いています。）当時、学校制度そのものが途上の中、豊かな心を育む音楽を国民に浸透させようと尽力したことから「音楽教育の父」と称されました。また、多くの学校の校歌を作曲しており、本校近隣では、横手高校や角館高校の校歌も小松氏の作です。

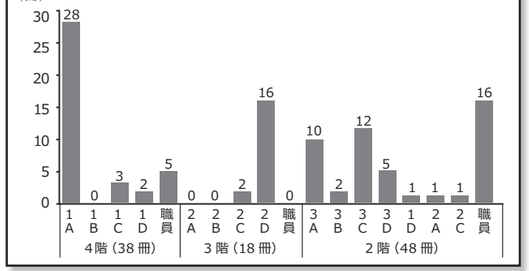
本校は今年度、創立〇七年目。私たちが普段なげなく生活している校内の至る処に、卒業生や本校に縁（ゆかり）のある方々の芸術作品が飾られています。そして、その中のつが校歌なのです。現在多方面で活躍している先輩も数多くいらっしゃり、図書館にコーナーを設けて紹介しています。在学中に本校の歴史を紐解いてみるのも楽しいのではないでしょうか。

※参考文献　『銀杏百周年』『新総合図書国語』（東京書籍）他

【図書館】クラス別貸出冊数



【移動図書館】　各階の貸出冊数



貸出の現状

今年度の城南高校図書館の貸出総数は四三〇冊（十二月三十一日現在）でした。これは例年の二倍近い数であり、貸出総数を掲載するようになってからは過去最高の冊数となりました。今年度、学校司書の配置によって図書館に出入りする生徒は確実に増えました。このことが貸出総数を大幅に増やす大きな要因だったと考えられます。

不読率に関する校内アンケートによると、昨年よりは本を読まない人の割合は減少し、読みたい気持ちのある人が増加しています。図書委員会では、読書の時間を優先してもらえるよう、工夫をしていきたいと思います。

私たちは何かの即効性を求めて読書をするわけではありませんが、三面で紹介したように、人間関係に役立つこともあるようです。「情緒や論理の深度を深める言葉を増やすためには、やはり読書が一番の早道だということになります。」（『友だち幻想』菅野仁）という意見もあります。読書はコミュニケーションに資する活動ということだと思います。

読書は対話だ、とも言われています。活字を読んで作家や登場人物と対話する、という不思議な体験をしてみませんか。

多読者インタビュー

◎三年Ｃ組　菅原琴美さん（22冊）

Q どんな時に本を読みたくなりますか？

A 日常に刺激がほしくなった時や、もともと読書が好きなので、通学中（電車）や、休み時間など、隙間時間があれば読みます。

Q どんなジャンルが好きですか？

A ミステリーが好きです。探偵ものなどのテレビドラマが好きなので、読む本はミステリーが多いです。

Q 今年読んだ中で一番心に残った本は？

A『屍人荘の殺人』シリーズを書いた今村昌弘の『魔眼の匣の殺人』です。

Q 読書の魅力は何だと思いますか？

A「国語力、語彙力」がつくことです。小学校の頃から読書をしていますが、今も国語が最も得意ですし、読書をしてもテレビを見ても、自分に語彙力がついたと実感することがあります。

◎一年Ｄ組　佐々木海翔さん（15冊）

Q 本を読みはじめたきっかけは？

A『かいけつゾロリ』を読んだことから、小説を読むようになりました。今はSF作品をよく読みます。

Q どんな時に本を読みますか？

A 今は時間があれば本を読みます。以前はゲームをしていましたが、ゲーム後の虚しさが嫌になって、読書するようになりました。

Q みんなにおすすめしたい本は？

A『ヴェニスの商人』です。携帯を片手に難しい語句を調べながら読みましたが、自分にはない考え方を知ることができました。

Q 読書の魅力は何だと思いますか？

A 視野が広がることです。新しい考え方を知ることができ、難しい語句を知ることで語彙力が身に付くと思います。

令和二年度　図書委員会活動報告

絵本の展示・ＰＯＰ交流

例年、城南祭では、絵本の「読み聞かせ」が行われています。しかし、今年は新型コロナウイルス対策のため、絵本の展示のみとなりました。各学年で絵本の紹介文を模造紙にまとめたり、かわいいＰＯＰを作ったりして工夫を凝らした展示ができたと思います。城南生のみ対象とした公開でしたが、好評をいただくことができました。

また、今年はＰＯＰ講習会が開催されなかったため、他校の図書委員会とＰＯＰをクリスマスカードや年賀状で送り合うという交流に参加しました。今回の交流によって、自分が読まないジャンルの本の魅力を知ることができました。講習会と合わせて、今後も続けていきたい企画だと思います。

移動図書館

城南高校では、生徒に様々なジャンルの本をたくさん読んでもらうために「移動図書館」を設置しています。図書館まで行く時間がない、たくさんの本の中から探すのが面倒くさいという人には最適かもしれません。移動図書館には、二階から四階までのコモンスペースに、テーマ別の県立図書館のセットと、図書委員が厳選した本校の書籍が展示されています。例年、先生方からも好評をいただいているので、今後も工夫を重ねていきたいと思います。

しおりコンテスト

今年は、新型コロナウイルス対策のため、城南祭の縮小や中止された活動もある中、図書委員会主催のしおりコンテストを開催することができました。校内のみの公開ではありましたが、例年通りの応募があり、最近話題のキャラクターをモチーフにしたものからオリジナルデザインまで多数展示することができました。

この人気の企画を今後も続けていきたいと思います。

図書館便りの発行

図書便りの発行は、城南生の書意欲を高めることを目的とし、読書に関する話題を定期的に届けられるように活動しました。定番コーナーとなった「新任の先生方へのインタビュー」に加え、「読書週間の歴史」や「読書がもたらす効果」など、読書に興味関心を持ってもらえるようなテーマを設定することができたと思います。また、図書委員が本気で選んだお薦めの本や、新着図書の紹介もできました。活字離れが進む中で、図書館便りが本を手に取るきっかけになってくれればと思います。読書を好む人にも好まない人にも、「本を読みたい」と思ってもらえるような記事づくりを目指したいと思います。

おススメの新刊本

今年も、図書館にたくさんの新刊が入りました。その中から、ぜひみなさんに読んでほしい一冊を、図書委員が紹介します。ぜひ、図書館へ足を運んでみてください。

『ジョゼと虎と魚たち』　田辺聖子　著

私が紹介する本は、田辺聖子著の「ジョゼと虎と魚たち」です。今冬アニメ映画になったことをきっかけに、原作を読みたいと思い、手に取りました。

この本は短編集で、男女のやりとりを描いた九編が収録されています。タイトルになっている「ジョゼと虎と魚たち」は、足が悪く、車椅子で生活するジョゼと、管理人として同棲する恒夫の不思議な関係を描いた物語です。ジョゼの高飛車な性格と二人の軽快な関西弁の会話が印象に残ります。どの話も面白いので、きっとお気に入りの一編に出会えると思います。

『桜の森の満開の下』　坂口安吾 著・しきみ 絵

私がおすすめする本は「桜の森の満開の下」です。このお話は文豪である坂口安吾の代表作の一つとされている短編小説集です。ある峠の山賊と、妖しく美しくも残酷で自分勝手な女との、幻想的な怪奇物語となっています。読んでいるうちに、二人の世界に引き込まれていくような、不思議なお話です。この本はイラストレーターのしきみによって、古典作品と現代風の鮮やかなイラストが融合されていて、小説としても、画集としても楽しめる一冊になっています。ぜひ呼んでみてください。

『私の美しい庭』　凪良　ゆう　著

この本は、「縁切り神社」のあるマンションに住んでいる人たちのお話です。オーナー兼宮司、娘とゲイの親友など、マンションの住人たちは、様々な悩みや葛藤を抱えています。本の中では、彼らの気持ちや葛藤、本音が書かれています。どこか切なく、けれども心が温かくなる物語です。誰もが、いろいろな悩みを抱えて生きているということ、少数派である人たちを隅へと追いやってしまう社会でのつらさを感じ、何が正解なのか、どうすることが正しいのか、考えさせられる小説です。短編小説のように構成されているので、読者が苦手な人でも、さらりと読めると思います。とっても面白かったです。

『本当に強い人、強そうで弱い人』　川村　則行　著

私が紹介したい本は、「本当に強い人、強そうで弱い人」です。この本は二〇〇一年に出版されたものです。今から二〇年も前に書かれたにもかかわらず、今の世の中にも共通する部分が多く、今年、文庫化されました。著者によると、「心の体力」を鍛える第一歩は、自分の弱さを知り、受け入れる強さを持つことだそうです。この本では、「本当の強さ」を教えてくれています。友人関係や、勉強、将来への不安など、悩み事の尽きない私たち高校生にとって、ぴったりの本だと思います。ぜひ手にとって読んでみ

編集後記

誰でも一度は「本を読まなければならない」という気持ちになることがあるようです。それは読書の好き嫌いに関わらず、理由も様々です。

三面のアンケートでは「国語力・語彙力」に対する危機感から必要性を感じるという回答が得られました。また、偶然にも多読者インタビューからも同じように「国語力・語彙力」が話題となり、それが身に付いた実感を聞くことができました。

今年度、本校では学校司書の配置があり、いろいろな意味で図書館の風通しが良くなりました。二面で紹介したように、図書の廃棄が進められ、図書館が「新陳代謝」しています。図書部では、皆さんの限りある大切な時間の中から読書の時間を作ってもらえるよう、工夫をしていきます。進化を続ける城南高校図書館にどうぞ足を運んでください。

図書館の新陳代謝

今年度、図書館では三四五七冊（書籍のみ）の本を廃棄しました。過去十年間でも、図書資料の廃棄としては最大のものとなりました。内訳は次の表のとおりです。

	分　類	冊　数	廃　棄	購　入
0	総記	421	33	3
1	哲学	357	194	9
2	歴史・世界史・文化史	1254	504	9
3	社会科学	1022	488	24
4	自然科学	809	487	17
5	技術・工学・工業	316	135	2
6	産業	117	46	0
7	芸術・美術	918	270	18
8	語学	336	100	7
9	文学（文庫含）	4358	1200	72
10	その他（カセットテープ等含む）	665	108	0
	合　計	10573	3565	161

（蔵書　令和元年度末の冊数）

そもそも学校の図書館というのは、学校での勉強の手助けをするためのものであり（教育課程の展開に寄与する）、生徒の教養を養うためにある施設です。そのために、図書館は書籍を中心とした多種多様な図書資料を備えておかなければなりません。また、生徒や先生方の利用に役立つ図書館であり続けるには、図書館の資料を質量ともに整備しておく必要があります。

だとすると、図書館にある本を廃棄することに違和感を覚える人もいると思います。しかし、「図書館の資料を質量ともに整備しておく」には、学校にとって適切で優れた図書の選択収集に努めると同時に、常に蔵書の更新を行う必要があるわけです。

もちろん、やみくもに図書資料を廃棄することはできません。しかし、図書館の新陳代謝といったものは必要なことなのです。実は、今年度から図書館の新陳代謝を活発にさせることができた理由が三つあります。

一、図書の専門家である学校司書（下タ村さん）が常駐することになったこと

二、図書館用のＰＣと書籍管理のためのソフトウエアが導入され、蔵書の管理がより正確にできるようになったこと

三、図書館規約について、図書廃棄規準を設けて大幅に改正したこと

特に、図書廃棄規準が明確化され、客観性のある成文化した規準にもとづいて図書館の新陳代謝がスムーズに行えることになったのが大きいのです。

それでは、どのような図書が廃棄されたのか表で見ることにします。令和元年度末の蔵書数は図書委員が数え上げた数字です。分類１（哲学）、分類４（自然科学）の廃棄率が五〇％を超えています。次に、分類３（社会科学）、分類５（技術・工学）、分類６（産業）の廃棄率が高いことがわかります。廃棄率の高い書籍は、前回の図書館報「翔」の記事「図書館で閲覧できる本」にあるように、「（理数・工の分野の）初版が五年以内の本は一冊もなく、日々科学技術が発展を遂げている現代社会を読み解く本が少ないのは課題」と指摘しています。このことから、廃棄規準に合った書籍が多かったのではないかと思われます。一般に廃棄率の高い分野は、その内容・資料・表記が古くなりやすく、利用価値の失われる分野であることがわかります。また、分類９（文学（文庫含））は廃棄される書籍の冊数が一二〇〇冊と非常に多くなっています。過去に話題になった小説などが主な廃棄対象でした。先生方は、その時代を思い出させる書名や作家を懐かしんでいましたが、時間の流れに耐えられず忘れられていた書籍ばかりでした。図書廃棄規準に照らし合わせながら本を選別していくわけですが、「本当に廃棄していいのか」と自問しながらの廃棄作業は案外つらいものです。

その他には、分類10（その他）のカセットテープやＶＨＳテープなどを再生するのに必要な機材がない資料も廃棄しました。また、すべての巻がそろっていない書籍については破棄しましたが、古典として図書館に必要な書籍の場合は、購入し直しました。しかし、すでに絶版となっている書籍については、買い直すことはできません。図書館利用のマナーについて考えさせられることもありました。

ところで、今年度は一六一冊（寄贈本含）の本を購入しました。図書の廃棄基準があるのと同様に、「図書資料選定ガイドライン」というものがあり、このガイドラインに従って購入図書が決定されます。生徒や先生方の購入希望をした図書が必ずしも購入されないのはそのためです。「図書資料選定ガイドライン」がどのようなものかが少しわかる二冊を紹介したいと思います。

【夜と霧】

池田香代子訳(1977)

霜山徳爾訳(1954)

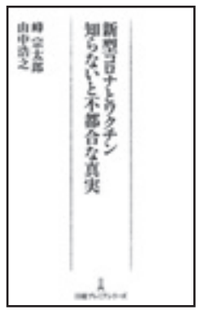
『夜と霧』はナチスの強制収容所での体験が書かれた本で、世界的名著として知られています。図書館には、すでに『夜と霧 新版』があるのですが、あえて古い版である『夜と霧』の購入を決めました。

新版は、現代語訳となっていて読みやすくなっています。ところが、古い版にはあった心が押しつぶされるような写真や手書きの見取り図などがすべて省かれています（掲載されている資料内容も異なる）。想像を絶するすさまじい収容所での生活をより深く理解するには写真資料が必要であり、生徒はこの歴史的事実を受け止める力があるとの判断から購入を決めました。

この本が世界的名著とされる理由は、著者の精神科医が経験したすさまじい実体験とそこからの生還の記録ということだけではなく、とてつもない苦境に陥った時でも〝希望〟を持つことのできる人間の偉大さが書かれているところにあります。

作者はユダヤ人でドイツ語で書かれました。そのドイツ語を直訳したような霜山版にチャレンジしてみるのもよいと思います。英語を勉強している生徒にとっては、同じヨーロッパ言語でも、これほどニュアンスが違うものなのかと感じることができます。余談ですが、女優の門脇麦さんはバイブルと絶賛し、ボクサーの村田諒太選手は愛読書だと言っています（amazon より）。

【新型コロナとワクチン　知らないと不都合な真実】



新型コロナウイルス感染拡大による被害が広がっています。日本国内を見ても感染者数が四〇万人、死亡者数が六千人を超えている状況です（一月末現在）。一部地域には緊急事態宣言が発令され、経済活動にも大きく影を落としています。石原良純氏が民放の番組で、「マスコミはコロナ関連の報道内容も、それに関するコメントも本質的には四月から同じことしか繰り返していない」と批判していました。暗に、マスコミの新型コロナウイルスに対する理解不足を指摘しているようにも思えました。

本書は十二月九日に出版されて以来、ベストセラーとなっている新書です。本の帯には「日本人がワクチンを打つ前に知っておくべきこれだけの真実」と書かれてあり、ワクチン接種が二月末から始まるとされるタイミングとしては最高です。しかし、この本はコロナウイルスやワクチンに関する情報整理にとどまらず、このような状況下で、どう行動するべきかを考えるきっかけを与えてくれます。今知られている科学的知見を読み解き、それを基にしたウィズコロナを生き抜くための本ということで、購入を決めました。

最後に、コロナ禍の困難な状況にあっても〝希望〟を持って立ち向かい、コロナの克服によって「新型コロナとワクチン　知らないと不都合な真実」を、時代を切り取った名著となればいいなと考えます。卒業記念の柱時計が何年かぶりに時を刻み始めました。図書館は、本を通して過去と現在を行き来することができ、今をよりよく生きるための考えるヒントを与えてくれます。そのためには、新陳代謝を繰り返しながら、常に新しい図書館として生まれ変わる努力が必要です。今年度も図書館は生まれ変わりました。ぜひ、そのような図書館を、さらに活用してください。

しおりコンテスト
応募作品

読書の必要性

全国的に高校生の不読率（一ヶ月に一冊も本を読まない人の割合）は深刻だと言われています。全国学校図書館協議会による読書状況の調査（毎日新聞社と共同）によると、二〇一九年五月の不読率は五十五・三％となっています。（二〇二〇年の調査は新型コロナウイルスを考慮して中止）本校も昨年の調査では高い不読率を示していましたが、今年はどうだったのでしょうか。

〈アンケート内容〉

①一ヵ月にどれくらい読むか。

②本を読まない理由は。

③「本を読まなければならない」と思うことはあるか。

④どんな時に本を読まなければならないと思うか。（自由記述）

①	2019 年	2020 年
全く読まない	72.9%	69%
1～3 冊くらい	23.6%	25%
5 冊以上	3.5%	5%

②	2019 年	2020 年
読みたいと思わない	23.9%	19%
他にやるべきことがあるから	41.8%	52%
読書よりやりたいことがある	34.3%	29%

③	2019 年	2020 年
ある	54.1%	56%
ない	45.9%	44%

アンケート結果からは、昨年からの大きな変化はありませんが、不読率は昨年よりも約四％減少しました。また、「読みたいと思わない」割合が約五％減少しているものの、「他にやるべきことがある」の割合が一〇％以上増加しています。これは、「読書をしたい気持ちはあっても、読書を優先できない事情があると推測できるのではないでしょうか。

どんな場合であれ、時間の確保は難しいものです。図書委員会では、今後も「読書の時間」確保してもらえるような工夫をしていきます。

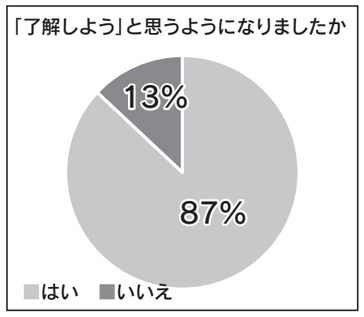
自由記述による「読書の必要性」についても昨年同様、「語彙力や表現力への不安」や「受験対策」など、読書を国語力に結びつけ、それに危機感を持った時に必要性を感じる、という意見が大半でした。確かに、本を読まない人よりも読書習慣のある人の方が読解力はあるかもしれません。しかし、「危機感」から無理に興味のない本を読むことには意味を感じませんし、一冊読んだからといって急に国語の成績が向上するものでもないでしょう。

「読書の必要性」、つまり「なぜ読書をしなければならないか」という問いは、読書における根本的な考え方かもしれません。そこで、読書後に「何かが変わるか」という問いを立ててアンケート調査を実施し、「読書の必要性」について迫ることにしました。

例えば、現代文の教科書を読むことも広義での「読書」と捉えたとき、単元の内容がずっと心に残っている、ということはないでしょうか。内容がたまたま自分の抱えている問題に触れていた場合、自分になぞらえたり置き換えたりすることがあると思います。

今年度、一年生の授業で鷲田清一の『わかろうとする姿勢』（出典：『大事なものは見えにくい』）を学習しました。授業では「他者の理解における、自分には了解しがたいこと」にについて、授業後に感想を聞いてみました。

単元の学習後に、「了解しがたい友人」に対して、「否定ではなく、了解しよう」と思うようになりましたか、との問いについて「はい」と回答した人は八七％にも上りました。



その理由は、

- 「了解しよう」という行動が、良好な関係につながると思ったから。
- 否定しがちだったけれど、わかろうとするようになったから。
- 人と意見が違うのは当たり前だと思うようになったから。
- 人が「良し」としているものを否定してはいけないと思うようになったから。
- 人を否定すると、傷つけてしまうと思うようになったから。
- 「わかる」ということは全部理解するということではないと分かったから。
- 同じものを好む人を否定することは、自分の好みも否定することだとわかったから。
- 他人は他人だから、意見が違うのは当たり前だとわかったから。
- みんなが自分と同じとは限らないと分かったから。

というように、「『了解しよう』という気持ち」が大切だ、ということに気付いた人や、「自他の距離感を知る」という現代のコミュニケーション問題に触れている人もいました。いずれ、読書後に考え方が変わったという人が九割近くいることがわかりました。

読書は思考力を育てます。読書によって、短絡的ではない複雑な思考ができるようになれば、豊かなコミュニケーション能力が身に付き、自分の力で良好な人間関係を築けるようになるのかもしれません。

学校においては国語科が読書推進の大きな役割を担っており、「読書の意義と効用について理解を深める」（学習指導要領）ための授業を展開しています。私たちは「即効性のある利益」を求めがちですが、少し時間をかけて、「読書の意義と効用」について、じっくりと自分なりの答えを見つけてほしいと思います。